保津川圖 解說

京都　西村總左衞門氏藏

左隻に「乙卯晩夏寫　應擧」、右隻に「應擧」と款し、共に「應擧之印」の白文方印を鈐す。乙卯は寛政七年、應擧歿年の作しかも絶筆に近いものである。

圖一は瀑水落ち水勢更に加はつて滔々巨巖の間を押流るるところ、一は水勢やゝ緩に、轉折して隱見起伏岩間を流れ降るところ、八曲一雙の屏風に仕立て、なか〳〵に壯觀である。

應擧筆保津川圖款印（原寸）

濃淡の墨を主調とし、水、樹葉にそれぞれ薄き藍汁、草汁を加へ、點苔は墨及び墨の上に濃き綠青、潤葉樹の葉には淡墨の上にやゝ薄き綠と白綠を附し全體に薄色ぼかしをかける。

又金砂子散を利用して消し書をなす。これ一般に見るものの如く構圖上の要求になるものなるも、寫生によつて得た賜であらう、いかにも自然的にして構圖の上に、畫趣の上に大いなる効果を示してゐる。

併し、今これらは從、見るべきは言ふまでもなく、寫形の妙である。岩を寫すに墨の濃淡を巧に分つて陰影を描寫して量感を表現し、更に彼が得意とする刷毛書を短かく重ね用ひて岩皴の層疊感を如實に示してゐる。水は元來應擧の好めるもの、靜水に、流水に、波濤にその巨腕を振つてゐるが、こゝに畫く奔騰する水は誇張も用ひず、奇巧も弄せずたゞ圓熟せる曲線を自由に驅使してよく萬變の水態を寫し、光澤までも描き出してゐる。又瀑水を畫くに、その落つる勢を現し、岩の後方にあるを示す爲か落水を墨描するところ、岩角を何物かをもつて伏せ上より一氣に描いたと見ゆる如き工夫をこらしてゐる。これら岩及水の描寫ここに至つた跡を見るに、壯年の作なる圓滿院藏懸瀑圖（安永元年四十歳の作）に於ては寫生を求むるに過ぎての繁雜、描法漢畫にとらはれし爲か生硬に失する弊あり、以後年と共にこれを去り寫生に於ける取捨の要を得、且つ柔潤さを加へ來つて金刀比羅宮襖虎之圖（天明七年五十五歳の作）、西本願寺藏青楓瀑布圖（同）の如きより金剛寺波濤圖（天明八年五十六歳の作）に及んで大成し、進んで金刀比羅宮襖瀑布山水圖（寛政六年六十二歳の作）を畫いてはこれを快心の作としたのであらう、翌年全く同巧のものを再びこに試み、見るが如き俊爽なる跡を示し得るに至つたのである。この前々年卽ち寛政五年より老病を發し、眼疾にかかつたと云ふが、それを裏切る如く、ここに精妙なる筆さばきをもつて形似の眞を描破して爽麗なる畫趣を作るその非凡なる才華をたゝへ應擧優作の一つとして推したい。

京都　西村總左衞門氏藏

尙本屏風の外筥表に題辭及び八枚折一双應擧畫とあり、裏に「寛政七年乙卯

六月吉祥日　千切屋總左衞門」とある。遺憾ながら題辭は判讀し得ぬが、屏風の古き包裝に「保津川圖」とありし由、題辭も恐らくかくあつたであらう、今傳へて保津川圖と云ふはこれによるものと思ふ。

沈天驤筆栢喜雀松鷹圖　解說

東京　武內金平氏藏

沈天驤は支那の畫史畫錄類にもその名を見出すことが甚だ罕であつて纔に歷代畫史彙傳が新市鎭續志なる書を引いて「銓從子得其畫法傳世者少」と云つてゐるのを稍具體的な記述とする。然るに淸朝には沈銓なる畫家が二名あつて、享保年間長崎に渡來せる南蘋沈銓は我國に於てこそ特に有名であるが、本國に於て二人の沈銓の何れが果して畫名高かりしかは些か疑問とすべく、單に銓の從子とのみ云ふて直ちに南蘋の緣戚と考ふることは疑なきを得ない。尤も畫史彙傳は初に南蘋沈銓を擧げ、次に沈天驤を擧げ、最後に直隷天津人靑來道人と號する別の沈銓を擧げてゐるので、この序位によつても大體天驤を南蘋の從子と見て差支ないようであるが、更に云はゞ、南蘋沈銓は吳興双林鎭の人、吳興は今の浙江省湖州の古名であつて、淸代にはその管する所双林鎭、新市鎭をも含み、今の湖州は卽ちその縣治の所在地であつた。一方沈天驤の鄕貫に關しては桑名鐵城氏所藏受天百祿圖軸の欵記に浙西駕千天驤畫とある由であり、（原田謙次郎氏日本目錄による）本圖軸所用の印記に吳興邥驤（邥は沈と同字なり）とあり、更に其名新市鎭續志に出ると云ふによつて初めて南蘋、天驤共に吳興の出であり、その親戚關係も確定し得るのである。而して所用印記「吳興邥驤」「雲亭」、「石耕」等に從つて思ふに此人諱は驤、字天驤號駕千、別に雲亭、又石耕と號した人であつて畫史彙傳に沈天驤として錄出せらるゝは些か他の體例に倣はぬ嫌があるが、或は特に字を以て行はれた人でもあつたかと思はれる。

沈天驤筆松鷹圖款記

同印記

沈天驤筆栢喜雀圖印記

この圖は設色輕淡、濃淡の墨を主調とし、沈銓の法を